THE TOUCH HEAVEN

もうひとつの音楽体験を求める読者に贈るスーパー・グラフ・ページ。知らない人には不気味かもしれないけれど、この世の中にちょっと満足できない人が聴けば、「リアルだぜ！」と思わず叫んで身がふるえてしまうというミュージシャンたちの登場だ。

サイキック&ライブ体験にオルタナティブ（ファンコ冷凍）かなしばり！

ジム・フィータス〈撮影：磯田守人〉

ノイズ・ビートの詩人、J・フィータス

JIM FOETUS

■ジム・フィータス

取材：高橋竜一
撮影：磯田守人

――現在のような音楽を始めようとしたのは、サム・ビザー・レーベルと関係ができたのがきっかけですか？

フィータス：スティーボ（サム・ビザーの代表）と会う前に、6枚のレコードを自分の金で作ったんだが、経済的にも実力的にもたいしたものはできなかった。スティーボと出会い、サム・ビザーが金を出してくれ、やっと求めていた音を実現できたのは事実だよ。でも、ボクが作っていた音楽は、ボク自身の環境から生まれたものであって、レコード会社と音の直接的な関係はないよ。

――ということは、自分の生活の中から、『ホウル』や『ネイル』などのアルバムのテーマが生まれてきたわけですか？

フィータス：一言で説明するのはむずかしいけれど、簡単に言えば、自分の心の中の闘争を解決するために作った。いってみれば、自分自身を精神分析しているようなものだよ。『ホウル』や『ネイル』といったアルバムの内容は自分の心層の深いところから、しぼり出したようなもので、こういう個人的なことをレコードにするのは、本来、とても恥ずかしいことだよ。自分の腕を切り落として、レコードのコレクションに入れるようなものさ。やめてしまえばいいと言いたいだろうけど、ボクはアーティストとして、なにかを創造したい、しなければならないという強い欲求に支配されているんだ。

――あなたの音楽のいちばん重要な要素はなんでしょう？

フィータス：ボク自身だろうね。要するに、音楽はボクの生命(Life)であり、妻(Wife)のようなものさ。アイディア自体はそれほど決まっているわけではなく、変わっていくものだよ。音楽を作っていくことは、テクノロジーだけではなくて、その過程の中で、自分自身を発見していくことでもあるんだ。

――東京でのライヴ公演についてのあなたの感想はどんなものですか？

フィータス：最後のショーは自分で満足してるよ。いくつかの国でコンサートはしたけど、日本でやった2回のショーは、今までの最高のものだった。作品的にまとまりが出てきたから……。

――レコードでしか知らなかったあなたのステージは日本のファンにとって、とても強烈でしたが、あなたにとっては日本のファンはおとなしすぎたのでは？

フィータス：ボクは、ニューヨークのショーに来てくれたファンよりも、よい反応があったと思っている。日本の場合、ミュージシャンのほうがファンよりも格が上だという習慣があるみたいだけど、そういうのはどうかと思うよ。ステージ上から見ていたら、ボクの音楽を体験しながら、なにかを感じているってことがわかったんだ。ボクは友人を作るためにステージに登るんじゃなくて、なんらかの言いたいことを伝えるためにショーをしているんだから、そういう観客がいてくれてうれしいよ。ファンのひとりひとりと個人的にコミュニケイトしようとしているんだ。

――より多くのものを、聴き手の心の中に起こすことができればいいということ？

フィータス：まあ、そうだね。ボクは、自分の心に感じてるものを伝えたいだけで、ファンのみんながそれをどうとろうと自由だと思う。ファンのみんなに喜んでもらうためでもないし、栄光のためでもないんだ。純粋に個人的な伝言だ。ようするに、自分のために曲を作ってるんだ。ボク自身の姿を曲で表現したくて自画像を描いてるようなもんさ。ステージを見てくれるファンの反応でボクのアドレナリンのレベルが変わるのを楽しんでるけれど、ただ、反応が悪いからといって変えようとは思っていない。

――つまり、ショー自身がひとつの作品としてパッケージされてるってことですね。

フィータス：そうだね。ただ、ボクはいつもショーのビジュアル面を変えたいと思ってる。日本でやったショーは、あくまでもボクのひとつの作品なんだ。たぶん同じショーはやらないだろう。日本の場合は、ステージでフィルムを使ったんだけど、もうおそらく使うことはないだろう。この前ニューヨークでやった時は、本物のブタの頭を10個使ったよ。いつも曲の内容を表現するビジュアルを使いたいと思うけど、はっきりとしたものは使いたいとは思わないんだ。ある程度、観客にまかせたい。

――レコードとライヴは、当然、あなたにとって、まったく違う作業でしょうね。

フィータス：レコーディングは、すごい編集をするし、かなり頭を使うから大変だ(笑)。それにくらべて、ライヴはもっとフィジカルなものなんだ。ボクの場合、バンドを組んでやろうという気はないし、いっしょにやりたいミュージシャンもいない。僕は1人でステージに立って、観客が恐怖におののくくらい迫力のあるものを打ち出したい。作品を表現する方法はライヴやレコードの他にもあるんだけど、金銭的な問題もあるから……。

――あなたのレコードやステージでは、豚(ピッグ)が、シンボルとして出てきますが……。

フィータス：英語では、ピッグという動物のイメージはあまり良くないんだ。ボクにとっ

ては、〝負け犬〟のイメージがあるんだ。「ピッグスウィル」という曲の題名は、ちょっとした意味を持ってる。ひとつには、「PIGSWILL」、つまり〝豚の餌〟という意味がある。もうひとつには、英語ではよく使うんだけれど、〝PIGS WILL FLY〟というフレーズと意味をかねてるんだ。こいつはこういう時に使うんだ。万が一にもおこらないようなことを言う時に、「それがおこったら、豚が空を飛んじゃうよ！」ってね。つまり掛け詞になってるのさ。

――音楽を作る時は、やっぱり1枚の絵を描くような気持ちで作るのでしょう？

フィータス：それもあるけど、そんなに単純なものではないよ。『ネイル』にはいろいろなコンセプト、アイディアが入りまじっているんだ。構想から完成まで約2年かかっている。ひとつひとつ違った曲が、すべて異なったコンセプトによって作られている。絵画という言い方をすれば、1枚のキャンバスに、たくさんの違った画材を使って描きこんだ作品といえるのかもしれないけど……。

――いちばん驚いたのは、あなたはシンセサイザーやコンピューターをスタジオの中でコントロールするというアカデミックな面を持っている。一方で、ショッキングなライヴを見せてくれる。その2面性を同一人物がやってくれるというのが結びつかないんですが……。

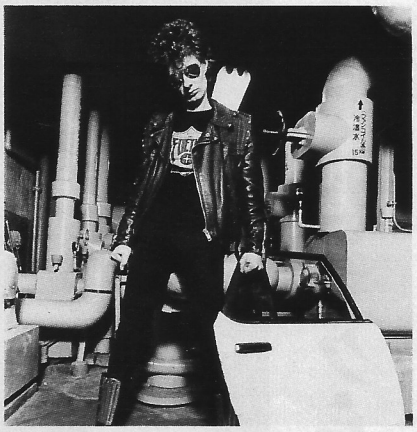
フィータス：この5年間に、スタジオ・ワークを勉強してきた。今の音を作るのに5年間費やしたわけだ。その過程でわかったのは、ミュージシャンは新しいテクノロジーの情報を知らなければならないということと、それの奴隷になってはいけないというふたつのことなんだ。そして、いちばんたいせつなのは、フィジカルな部分。テクノロジーは二番目なんだ。そのバランスが重要さ。たとえば、ストリングスの音がほしい時、そういう楽器をうまく弾けないから、イミュレーターのようなものを使ってしまうけれど、本当はできるだけ自分の手で音を作っていきたい。ドラム・マシーンでリズムのプログラムをするより、本物のドラムを使いたい。なぜなら、聴く人たちに、血と汗のような人間的なものを感じてほしいから。

――そういう音楽の作り方は大好きだし、賛成できますね。作り方は同じなのに、あなたの音楽と、いわゆるエレクトロ・ポップ／テクノ・ポップとは違った感触を持っている理由は、そこにあるのかもしれませんね。

フィータス：まあ、ラジオでよく流れているような音楽は、ボクは好きじゃないし、聴くとがっかりしてしまうから、あまり聴かないね。逆に言えば、今のミュージック・シーンの音がボクにとって、ものたりないから、自分自身が聴きたい音楽を作っているんだ。実際、ボクは自分の作った曲をよく聴くんだ。でも、たまには、プロデューサーとして、仕事上、ラジオの曲を聴くこともあるよ。たまには大嫌いな曲もね。どうして、それが嫌いなのかを知るために(笑)。イヤなTVや映画もそういうふうに観ている。たまには、そういうものから、とてつもないユーモアをいただける場合もあるからね。

――現在、ニューヨークに住んでいるそうですね。

フィータス：1978年、オーストラリアからロンドンに移り住んだんだけど、もう目新しいものもないし、飽きてしまった。ニューヨークはロンドンよりもワイルドな場所さ。人びとはやりたいほうだいやっているし、エキサイティングだよ。もっとも自分の環境を変えたいと思ったら、いつでも、どこへでも行ってしまうけれどね。



メーザー・ヴォーカル・ハウス'86年度4月生募集中!!

●FIRST VOCAL COURSE
(基礎コース・1年間　昼、夜クラス、毎月募集)
専攻実技：VOCAL(単科)
選択科目：1 VOICE TRAINING
2 PIANO-KEYBOARD
3 ENGLISH CONVERSATION
4 ENSEMBLE
5 THEORY
6 RHYTHM TRAINING

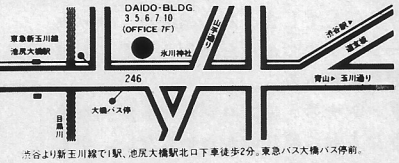
●VOICE TRAINING COURSE
(単科コース・1年間)
専攻実技：VOICE TRAINING

INSTRUCTORS

伊藤　君子	宮本　典子
金子　マリ	村田　有美
菊地　真美	VOICE TRAINING
木本いず美	安田　直弘
楠木勇有行	山川　秀明
橋本　俊一	

●入学要項は¥240切手を同封の上、①住所②氏名③年令④電話番号⑤希望コース⑥ご覧の誌名を明記してご請求ください。

■メーザー・ヴォーカル・ハウスは定員制です。同校の授業見学はTELで時間割を確認の上おいでください。



渋谷より新玉川線で1駅、池尻大橋駅北口下車徒歩2分。東急バス大橋バス停前。

ミュージック・カレッジ・メーザー・ハウス／メーザー・ヴォーカル・ハウス

MUSIC COLLEGE MESAR HAUS
MESAR VOCAL HAUS

〒153 東京都目黒区大橋2-16-23大同ビル Phone.(03)468-2145～7